

KIBO NO NIJI きぼりの虹

発行所
 北海道大学生協同組合
 札幌市北区北8条西7丁目
 教職員委員会編集
 電話 011-746-6218

主な記事紹介

- 四画 北大生協を支える連帯組織その② 新たな連帯組織の枠組みを目指して
- 五画 イマ時の北大生
- 六画 こころの健康を考える⑨ 健康維持のための実践

北海道大学大学院
 教育学研究院 渡邊 誠



**北方生物圏フィールド科学センター
 酪農生産研究施設**
 教職員写真同好会 伊藤仁浩

本年4月1日から電気の小売全面自由化がスタートし、一般家庭やコンビニ等を含めたすべての需要家が電力会社や料金メニューを選択できるようになった。需要家の「電気」に対するニーズは本来多様であつて、多くの需要家は、価格や品質、信頼性、環境性などの面で自分の好みに最も合った電気を選んで使いたいと思つている。にもかかわらずこれまで、地域の電力会社が料金、品質などを一元的に管理・決定（国が認可）し供給していたため、需要家に選択の余地は全くなかつたし、電力会社の供給する電気が本来に需要家のニーズに合致しているのかどうかを判断することさえ難しかった。今回の改革は、需要家の選択肢を広げると共に、供給者選択の行動を通して、需要家ニーズを適正に把握できるようにするという点で、社会的・経済的な意義は大きなものがある。

ただし、電気という商品は、他の商品には見られない工学的特徴を持つており、自由化の中で私たちが、それらの特徴を理解した上で冷静に選択・行動することが求められる。まず電気は、その原資が何であるとも、誰が供給しようとも、送配電ネットワークを通じて届けられる限り、品質（電圧や周波数）や信頼性（停電の

Opinion!

電気事業の自由化と工学技術

北海道大学大学院
 情報科学研究科教授
 北 裕 幸



起こりやすさ）といった電気そのものの物理的性質には全く差がないという点である。従つて、例えば、「ときどき停電してもよいから安価な電気を欲しい」とか、「周波数の変化は許容するので風力発電由来の電気だけを使いたい」というニーズには応えること

あると言える。

もう一つの重要な特徴は、電気は電気のままでは貯められず、しかも光の速度で運ばれるという点である。すなわち、私たちが使う電気は、その使う時刻に使う量だけ生産されなければならない（同時同量という）。多くても少なくても早くても遅くてもダメなのである。このため、電気の供給には、非常に優れた制御性能を持つた電源が必要不可欠であり、例えば、太陽光発電や風力発電などのように天気まかせの電源だけで電気の供給を行うことは、同時同量の観点からは相当な困難を伴うであろうことは容易に想像できる。

欧米諸国では十数年以上も前に電力の自由化をスタートさせており、前述した自由化の難しさがすでに顕在化してきているという報告もある。今後わが国では、先行する諸外国の経験から得た多くの教訓を踏まえ、わが国独自の適切な制度設計を行っていくことが望まれる。また、現在では、IT、スマートメーター、蓄電池、パワーデバイスなど、十数年前までには考えられなかった新しい技術を電気事業に活用できるチャンスが広がっている。自由化の効果を最大限に得るために、世界初となる先進的な電力技術をわが国から発信していくことが期待される。

北大生協教職員委員会委員長
大 春 宮 間

拡大教職員委員会の報告

中央厚生会館（中央食堂）施設改善プロジェクトの 取組み報告会を開催しました。

2月18日、工学部食堂ラウンジにおいて拡大教職員委員会を開催いたしました。

北大生協教職員委員会は毎月1回、定例の委員会を開催しています。そこでは、毎月学内数カ所で開催している教職員総代会議で総代の皆さんから出されたご意見（組合員の声）の検討や機関紙「きぼうの虹」の企画会議などを行っています。しかし、8月だけは総代会議が開催されないことから時間に余裕があるため、教職員委員だけではなく生協理事、学生委員会、院生委員会、生協職員、教職員総代などに呼びかけて「拡大教職員委員会」を開催しています。昨年の8月には「書籍」をテーマに活発な意見交換が行われ、とても有意義な委員会となりました。

これに味をしめて「年1回ではなく冬にも拡大教職員委員会」との思いが募り、この度の開催と相成ったわけでは

北大生協理事会の環境課題推進委員会メンバーが北海道大学サステイナブル推進本部の助成を受けて取り組んだ「つくる！提案プロジェクト」の報告を基調として、そのフォローアップ的な意味合いも含め、組合員にとって最も身近な北大の福利厚生施設について議論を深めることを目的に開催しました。

2月18日（木）、工学部食堂ラウンジ、午後6時15分、予想を大きく上回る35名*の参加を得て拡大教職員委員会は始まりました。委員会は2部構成で、第1部は「つくる！提案プロジェクト」のプロジェクトメンバーから、プロジェクトの趣旨、他大学の福利厚生施設の視察報告、ワークシヨップ「中央食堂をプロデュース！」実施報告、北大生協のエネルギー・水の消費実態、の4題についてプロジェクトプレゼンなどにより報告をしていただきました。

第2部はフリートークとし、第1部の報告についての質疑応答や参加者が自由に意見などを述べてもらう場としました。

主催者の感想はふたこと、「やってよかった」「時間が足りない」です。第1部の報告についてはどれも興味深く、他大学の福利厚生施設との比較や利用者の意見分布・提言、エネルギー消費などの観点から、北大の福利厚生施設、特に中央厚生会館の問題点が浮き彫りにされたと思われました。また、第2部では参加者から多くの質問・意見が出されました

が、学内に学生・教職員が自由に憩えるコミュニティスペースがとても少ないとの意見に共感される方が多く、その理由の推測や改善策などについても話題が膨らみました。

「学内世論」という言葉を強く意識しました。大学を構成している、学生、大学院生、教職員の思いをまとめ、より良い大学を築き上げる意思を表現するのは、大学生活に密着して活動する大学生協にしかできない仕事なのだと思います。

最後に、柿澤理事長が「話し合いの場を作ったことで、何を生み出すのかが大事だと思う。これからも、いろいろな階層の人たちの意見を聞いて、生協はその意見を吸い上げて大学側へ提案していきたい。」と締めました。

なお、今回プレゼンしていただいた「つくる！提案プロジェクト」の詳細について、今号から数回のシリーズとして本誌に記事を執筆していただくことになりました（とりのりのページです）。これを機会に、北大の福利厚生施設、特に中央厚生会館の在り方について、全学的に議論の輪が広がることを切望する次第です。

*「つくる！提案プロジェクト」メンバー：院生3名、学部生1名、教職員（サポートメンバー）2名
生協教職員理事2名、教職員総代・組合員2名、学生委員会2名、留學生委員会1名、院生委員会2名、生協職員14名、その他1名、生協教職員委員会5名

いじわるじいさん

昨年暮れから何度か藻岩山に登った。9時慈啓会病院前を出発。その時にはもう登山道は踏み固められ、幅1m程の所もある。小さな地蔵が道の脇に並び、札所のように番号がついている。地蔵の周囲がいつも除雪されているのが驚きだった▼3月は早めに

出発した。2日前の吹雪で雪が深く、枯枝やヤマアジサイが散らばっていた。登山道も人ひとりが通れる幅しかない。途中の斜面に人が見える。腰を折りスコップで穴を掘っていた。地蔵はまだ見えていない。私に「階段、除雪していないから気を付けて」と言う。登山道の一部が階段状になっているのだ▼山頂で小憩後、下山開始。5合目付近で、背後からベルの音が聞こえ道を譲った。ポランティアのゼッケンをつけた赤いヤツケの小柄な女性。60歳代か、雪に映える赤がたちまち遠ざかる▼さらに下ると、彼女が雪かきの男性等と話していた。一仕事終えての打合わせのようにみえる。登山者が多くなる前の仕事だったろうか。脇を通り、雪のはねられた階段を下りる。後ろからベル音。道を譲る。赤いヤツケが足取りも軽快に、私を抜いて降りて行く。雪山に響くベル音が心地よい。（今日子）

シリーズ「つくる！サステイナブルキャンパス提案プロジェクト」Vol.1 『北大らしい』キャンパスを考える



教育学院修士2年
鎌田 由実

はじめまして、教育学院修士2年の鎌田由実と申します。学部時代は、北大ではなく小樽商科大学に通っていました。

毎回メンバーを替えての執筆ですが、第1弾を担当させて頂きます。トップバッターで何を書くか悩むところですが、プロジェクトを通じて感じたことを振り返ってみたいと思います。

まず、プロジェクトを通じて感じたことは大きく2つあります。1つ目は、「北大らしい」キャンパスを目指すことの大切さです。プロジェクトの調査の中に「他大学の福利厚生施設の見学（写真1）」がありました。（私は残念ながら行けなかったのですが…）その中で、エネルギーを効率よく生み出す設計や、席数を確保された食堂など優れた点が数多く報告されています。印象的だったことは、それぞれのキャンパスにその「大学らしさ」が残されていたことです。大学の建物の外壁に、これまでの歴史がオシャレに掲示されている建物や、古くから残されてきた木々を囲むようにメインストリートが再設計された…など、

場所ごとに大切なストーリーが残されていました。

それでは、「北大らしい」キャンパスとは何でしょうか？自然が豊かで広大なキャンパスがあるのでは、何もせずとも十分北大らしさが出ているのかもしれない（笑）もちろんこれも北大らしさですが、そこで学生、教職員などキャンパスに居た人々が何を感じ過ごしてきたかも大切に思います。北大に入学してから、北大各部生や院生、教職員の方々から北大に対する愛着や思いの言葉をよく耳にしました。北大の目指す

キャンパスを考える時、このような声を集め、「北大らしい」を振り返る機会も必要なのかもしれません。

2点目は、北大生の「声」を集める大切さです。プロジェクトの中で「声」はキーワードの1つでした。

それは意見箱から集まる「中央食堂が狭いから広くして欲しい」などの単純な要求を集めることだけでなく、その奥に北大生が何を求めているか「を考えること」にあります。

例えば先ほど例に挙げた「中央食堂が狭いから広くして欲しい」という声は、物理的な中央食堂の席数が欲しいだけではなく、「友達とゆっくりランチがしたい」や

「自習室以外に気軽に話し合えるスペースが必要だ」という意識があるかもしれません。これは単純な要求からだけでは読み取ることができません。（もちろん、このような意見を集めることは大切だと思います。）潜在的なニーズと違ってしまえば少し堅苦しいですが、北大生の意識していない本当に求めているものが「声」なのだと考えました。

これらの「声」を集めるために、プロジェクトでは「北大生の行動分析」として北大生と教職員との1日の行動を分析しました。（写真2）サンプル数は少なく、試験的な調査でしたが、北大生の中央食堂を利用する際に見える特徴的な傾向がだまかに分かるのではないかと考えました。

この調査の結果は、昨年12月開催のワークショップ「中央食堂をプロデュース！」にてディスカッションの資料として使用しました。これをもとに、ワークショップでは北大生の「中央食堂に対する不満・要望」だけではなく、「北大生が大学生活において何を求めているか？」を考えました。

ワークショップを終えてみて、北大生の声を集めるためには、学生や教職員と話し合い一緒に考えることが重要なだと実感しました。当たり前な様な気もしますが、プロジェクトメンバーが一方

的に意見を聞き取ってしまうと、同じ北大生の間でもサービスの提供者と利用者のような関係ができてしまいます。すると仮に単純な施設に対する要望を解決しても、利用者としての意識を持ってしまえば、また次の不満を抱いてしまいます。しかし当事者意識をもつことで、不満を持つだけではなく、「どうすれば良くなるか？」そのために何が必要か？」を前向きに考えることができるようになるのだと感じました。

今回のプロジェクトは、理系、文系学生、教職員の方々と北大キャンパスを捉え直す貴重な機会となりました。

単純な施設改善ではなく、北大らしいキャンパスを目指すためには、このような機会を継続的に設けなくてはいけないと感じました。プロジェクトは終了してしまいましたが、報告をまとめるだけではなく次に繋げるために何をすれば良いかを考えなくてはなりません。

最後に、私にとってこのプロジェクトは北大キャンパスを考える素晴らしい機会となりました。プロジェクトメンバーをはじめ、北大生協関係者の皆様、教職員の方々には大変な御協力を頂きました。本当にありがとうございます。



東大駒場キャンパス（写真1）



「中央食堂をプロデュース！」ディスカッションの様子（写真2）

北大生協を支える連帯組織 その②

新たな連帯組織の枠組みを目指して



大学生協北海道事業連合 専務理事 佐藤 敦紀

大学生協北海道事業連合の佐藤と申します。前回に引き続き紙面を拝借させていただくことになりました。今回は北大生協が展開する様々な商品やサービスが、どのように提供されているかをご紹介します。道内12の大学生協が創った事業連帯組織である北海道事業連合についてご紹介しました。今回はもう少し話のスケールを大きくして全国に広がる連帯組織について、また全国で協同行う事業についてご紹介しようと思います。

全国に9つの事業連合

現在全国には204の大学生協、6つのインターカレッジコープ（生協の無い地域の学生が加入できる大学生協）があり、それぞれの地域毎に9つの事業連合があります。1970年代から1999年にかけて設立された各地の事業連合は、名前は同じ事業連合で商品仕入や企画等の基本的機能は同じですが、それぞれの地域の実状や特性に合わせて少しずつ違う機能や役割を担いながら全国の大学生協を支えています。例えば北海道が果たしている職員の採用や教育等はすべての事業連合が行っている訳ではありませんし、東京事業連合には店舗改装計画等を立案する部署がありますが

北海道事業連合にはありません。

全国で共同仕入れする事業

全国の各大学生協が展開する様々な商品やサービスの全てがそれぞれの事業連合で条件交渉、企画がされているかと言えば、そうでもありません。例えばコープマークが目印のコープ文具（最初に開発されたのは毛入表紙の大学ノートで1958年、今でも販売しています）はメーカーと協同で



毎年5万台弱供給する
新学期パソコン



全国初のオリジナル商品
毛入表紙の大学ノート

開発し全国の大学生協で仕入れていきます。また、毎年新学期に新生にご提案しているノートパソコンもメーカー数社と半年以上の商談を行って全国のオリジナル商品として製造し販売しています。書籍部で取り扱う書籍の取次会社と

の基本的な商談も全国一律で行っていますし、ベッドや机、家電製品等の新生活用品、白衣、海外旅行商品等も全国の大学生協で同じ商品と同じパンフレットでご提供しています。全国でまとまること



新生活用品は全国の大学生協で
仕入れています

によりスケールメリットが見込める商品やサービスはそうした方がより安く、効率的にご提供出来るからで、紹介したこれらの事業は各地の事業連合ではなく全国大学生協連合会が行って来ました。北大生協から見ると商品の仕入れをするルートが2系統ある感覚でしょうか。おにぎりやパンは事業連合から、パソコンや書籍、新生活用品は全国大学生協連合会という風に。全国大学生協連合会とは、所謂大学生協の上部組織であり行政との窓口機能等も果たしています。各会員が共通機能を業務委託するために作った事業連合

とは違う性格の組織ですが、例えばJR各社やアップルは取引口座を全国一つに統一する必要がありますし、各地に事業連合が出来るまでの時期にはその機能を担う必要があった為全国の共同仕入れの機能を果たしていました。

連帯構造の変化

1990年代まで全国大学生協連が果たしてきたこれらの全国共同事業ですが、1999年以降事業分野毎に各地の事業連合に委託されるようになります。

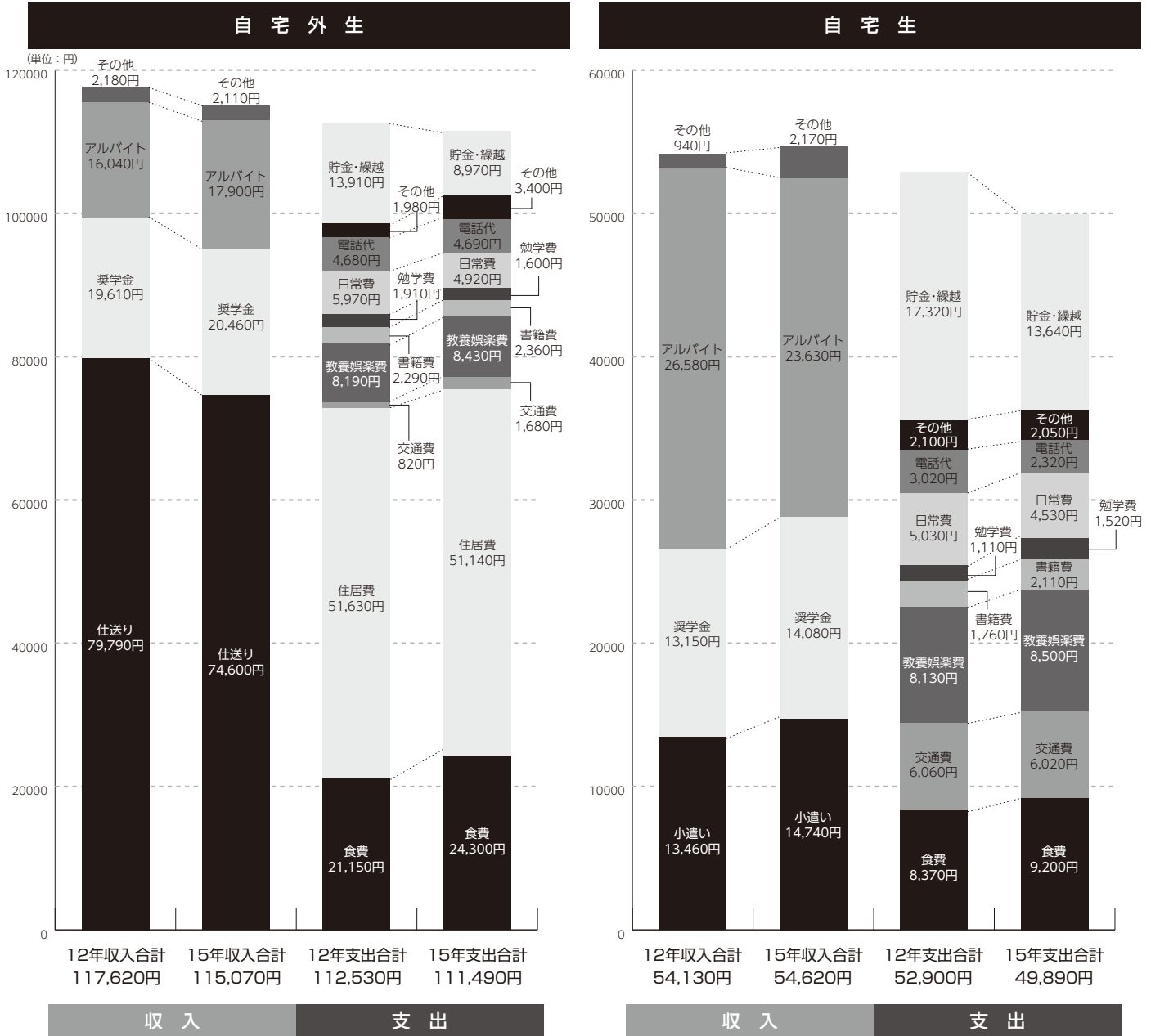
それは何故でしょうか？やはり餅は餅屋とでもいうのでしょうか、日々事業を行う組織がその機能を担う方が刻々と変わる事業環境の中ではうまく行くことの方が多いと思われましたし、2007年に成立した改正生協法により会員指導等の本来連合会が持つ機能の強化が必要であった為等の事情によります。

何やら難しいお話になってしまいました。ですがこうした流れが次回お話しする新たな連帯組織を模索する原因になっているのです。引き続きもう1回だけおつきあいください。どうぞ、よろしくお祈りいたします。

イマ時の北大生 —— 増加する奨学金受給金額

2015年10月に実施した学生生活実態調査（全国大学生生活協同組合連合会 詳しくは URL：http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html 参照）の北大生の結果がまとまりましたので、その一部を報告します。誌面の都合上、今号では「学生の収入と支出」について掲載しています。

住居形態別にみる収入と支出



アンケート回答者は、380名です。住居形態別の内訳は、自宅生116名（30.5%）、寮生を含む自宅外生が264名（69.5%）となっています。昨年の『きぼうの虹』では、東日本大震災が発生した2011年度の数値と比較してきましたが、今回はアベノミクス実施直前の2012年度を基準に2015年度アンケート調査集計数値とを比較しました。

アベノミクス実施前と今回の調査データとを比較すると、自宅外生の仕送り額が減少しており、仕送り額が減少した分をアルバイト収入と奨学金で補っていることが見て取ることができます。一方で自宅生の収入は一見、全体として伸長しているように見えますが、『その他』の項目を除くとほぼ横ばいの状態です。

【奨学金受給金額の増加】

アンケートでは、自宅外生の【収入合計】がアップしています。その中でも奨学金は850円とアップしています。また、自宅生の【収入】のうちでも、奨学金は930円アップしています。特に自宅生の奨学金受給金額は2013年、2014年と一旦は減少したものの、2015年は再び増加しております。今後も、景気動向によっては、奨学金の増加がありえると思われます。奨学金の返済は、近年、大きな社会問題となっており、注視していく必要があると思われます。

支出面では、特に自宅外生は、2014年に実施された消費税増税や食料品値上げの影響も受け、食費を筆頭に総じて各項目アップしていますが、自宅生も含め、【貯金・繰越】金が減少（自宅外生▲4,970円 自宅生▲3,680円）となっております。これは最近の物価上昇の影響を受け、貯金に回す余裕が無くなってきているかと思われます。

心とからだ健康を考える

大学院教育学研究院 准教授

渡邊 誠



もし自分の研究が手厳しく批判されたら、どうするか。うーん、皆さん、どうされているのでしょうか。こんな風に言われたよ、大変だった、という話を仲間とすることはありますが、まとまった対処法のようなものはない。私にはどうも、研究発表を手厳しく批判されたという経験が、豊富(?) 嬉しくないです。一般的な部類のような気がする、その場合どうするか、という問題について、考えてみたいと思います。

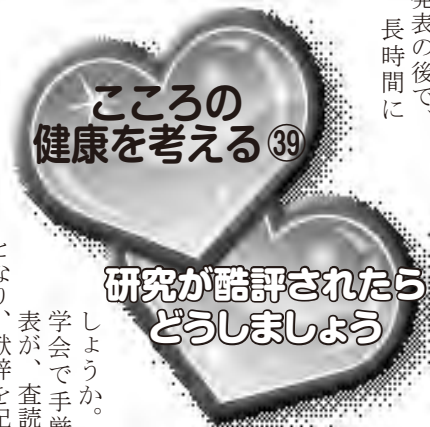
前回お話ししたように、まずはその原因を見極めるといのが、研究としての本筋でしょうが、これが意外と難しい場合があるように思います。幾つかの場で発表の機会があり、比較的肯定的な評価を受けた一方で、そのうちのひとつでは酷評であって、発表の後で、座長を務めてくださった先生に、長時間に渡って私のあてもない、でもない、でもないという話にお付き合いいただいたのにもかかわらず、腑に落ちる理由が今もって見つけられない、という経験が、私にはあります。専門分野による差はあると思いますが、学術研究の評価に関する要因は複雑であり、たとえその時点で最も優れた水準の研究であってさえ、その評価は少なくとも十年単位の時間がたたないと、わからないというのが本当のところではないでしょうか。

しかし、酷評の理由を知るとい目的のためにも、誰か、できれば気の置けない仲間とのざつぐばらんな話し合いの機会は、是非とも欲しいものだと思えます。信頼する研究上の師の助言を仰ぐというのも非常に良いのですが、ざつぐばらんな話し合いには、他に代え難いものがあると思えます。以前に触れた足立巻一『やちまた』には、間違っていると思えばどんな相手に対しても歯に衣着せず批判をし、自分が受けた批判は実に素直率直に受けとめるという、義門という名の学僧が登場します。史実に基づく記述です。私は、これが研究者の理想だと思う一方で、人

間のやること故なかなかこうはいかないという思いを、抱かざるを得ませんでした。険しい雰囲気の中、厳しい批判に耐えて弁論することは、実に大変なストレスフルなことだと思えます。気も沈めば怒りも湧き、そして不甲斐なくも思いというのが、人ではないでしょうか。そういう思いを表現し、分かち合い、昇華させていくには、ざつぐばらんな話し相手が、是非とも欲しい。私はそう思います。

あとは繰り返すうちに、手厳しく批判されることにも、ある程度は馴れてゆく場合が多いように思います。どんな激烈な体験であつても、それに繰り返して直面する中で、多くの場合、良い意味での馴れが生じるとは、持続エクスポージャー療法というトラウマ治療の教えるところでもあります。研究としての貫徹という点では、批判を受けた研究を、より高い次元で結実させられれば、最も望ましいでしょう。自分が座長を務めた学会で手厳しく批判された発表が、査読を通して届けられるという経験は、私には、胸をなで下ろすような思いとともに、喜びを与えてくれるものでした。自分も見習いたいと思っています。ただ、必ずしも成功や達成が、こころの健康を保証するわけではないというのも、一面の真実だと思えます。

それにしても、ポロカスに言われても性懲りもなく研究発表をしようとするのは、考えてみれば不思議なことです。知る喜び? 研究者協力者の好意に報いたいという思い? 評価された時の経験がクセになっている? など浮かんできますが、他にもいろいろとありそうです。次の学会発表もどうなることやら...



こころの健康を考える 39

研究が酷評されたら どうしましょう

北大生協留学生委員会より

新入留学生にお渡しする日用雑貨品提供ご協力をお願い

.....

新入留学生の生活を少しでも支援できるように、ウェルカムパーティー終了後、日用雑貨品をお渡しする場を設けます。お皿1枚・カップ1個でも構いません、ご自宅で眠っている物品がございましたらご協力をお願いします。

★ 受付期間：2016年3月22日 (火) ~ 4月6日 (水)

★ 受付店舗：会館店1F、中央店、北部店、工学部店の生協購買カウンター

◎ お受けできるもの

お皿 (大・中・小)、コップ、マグカップ

※可能な限り未使用のものをお願いいたします

ハンガー、未使用のタオルなど


× お受けできないもの

家電、ガス器具、家具類、刃物類、衣料品

※しみや黄ばみなどの変色や油污れのあるもの、破損品はお持込にならないようお願い致します。

みなさまのご協力をよろしくお願いいたします。

問合せ先：北大生協 留学生委員会
011-746-6218 (内線3285)





キャンパス放浪記 in 函館… 第6回

生きたイカに会いに来ませんか？

北海道大学名誉教授（函館国際水産・海洋都市推進機構・函館頭足類科学研究所） **桜井 泰憲**



今から約2年前の2014年6月、函館市によって、市内の旧函館どっく跡地に「函館国際水産・海洋総合研究センター」が開所しました。場所は、市電の終点の「函館どっく前」から海に向かって進むと、国内最古の護岸堤防のある入舟漁港が左手に見えます。そこから道路を右に曲がって函館どっくを右手にしながら堤防沿いに進むと、奥に突然大きな白い建物が現れます。徒歩ですと約15分ほどでしょうか。その建物の前の岸壁には、北大の練習船「おしよろ丸」と「うしお丸」が停泊していることがあります。

このセンターには、北大の北方生物圏フィールド科学センターの生態系変動解析分野の研究室が入居しています。この他にも、函館水産試験場、はこだて未来大学の一部や民間企業が入居する産学連携の協同研究の場ともなっています。この建物の入り口を入り、右側に進むと、カーテンに囲まれた場所に着きます。ここには、長年の夢であった300トンの大型飼育実験水槽があります（タイトルバックの写真）。これより大きな水槽は水族館にたくさんありますが、海洋生物の飼育実験を目的とする大型水槽は、国内では初めてです。私たちはこの水槽を使って、ヤリイカやスルメイカの生態研究をしています。スルメイカではこれまでの繁殖生態に研究成果を確かめる飼育実験、ふ化幼生の最初の餌の謎を解明する飼育実験を、北大水産の学生・院生と一緒にしています。

2014年7月に、函館国際水産・海洋総合研究センターの大型水槽で、私が長年思い続けたスルメイカの群泳を再現できるようになりました。夢でしかなかったスルメイカが群れて泳ぐ姿を、この眼で見ることができました（写真1）。もちろん、見学に来ます一般の方も実験の様子を大型のアクリル窓から観察できます。大水槽は幅10メートル、奥行き5メートル、水深6メートルですが、湾外から取水して濾過した新鮮海水を使って、濾過循環と加温冷却しています。また、水深や流れの速さ、そして照明方法なども自在に変えられますので、様々な海洋生物

の飼育実験ができます。

私たちも、光の強さや色の違いに対するイカ類の反応行動も調べています。昨年11月初めに、世界のイカ・タコ類の研究者250名が参加する「函館頭足類シンポジウム」を開催しました。この時にも大型水槽内のスルメイカの群泳を公開したのですが、著名なイカ・タコ類の研究者の誰もが「ワオー！ファンタステック！」の歓声をあげていました。皆、初めて見る光景だったようです。こんな実験も見てもらいました。カーテンで水槽を完全に真っ暗にしておき、水槽の片側に照明を点灯すると、イカがその光の当たる場所を避けるように影の場所に一斉に移動します。照明の位置を変えると、一斉にイカが同様に移動をしました。世界の研究者も、イカが「光は好きだけど、影の部分に集まる」ことを実感したようです。夜の海を照らすイカ釣り漁船の漁火に誘われて、その船の下の影の部分にやってきたイカたちが、自動イカ釣り機で次々と釣りあげられるのは、こうしたイカの光に対する反応行動があるからです。

さて、今年的大型水槽でのイカの飼育実験は、まず4月中旬からのヤリイカの繁殖生態に関する研究から始まります。一般の方にも見てもらうつもりです。水槽内には産卵用の人工産卵礁を設置します。ヤリイカはその棚の底の部分に細長い「卵のう」と呼ばれる卵の入ったカプセルを産み付けます。その時には、大きな大型オスが、この人工産卵床付近に縄張りを作って、他のオスを排除してメスを誘い込んで「交尾」しながら産卵場所へメスを誘導します（写真2）。7月末から9月までは、スルメイカの群泳、生きた魚を捕食する様子、あるいは産卵された巨大な透明卵塊（写真3）が、その時々に見学することができます。

函館の新鮮で美味しいイカを食べ、その生きた美しい姿をぜひ見に来て下さい。そして、余力がありましたら北大生協で、私の著書「イカの不思議一季節の旅人・スルメイカ」を購入しませんか！持参の方にはサインしますよ！



写真1 スルメイカ群泳



写真2 ヤリイカの交尾行動

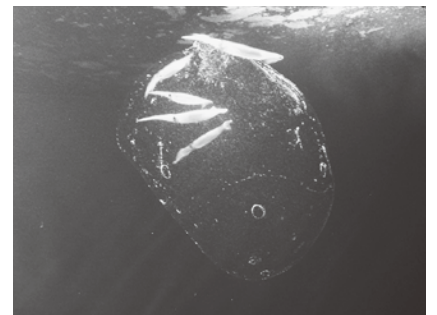


写真3 スルメイカと卵塊

北大生協には「学生・院生・留学生・教職員」の4つの組織委員会があります。

北大生協組織委員会報告

学生委員会

■新入生歓迎活動 「新友のつどい」

北大への入学が決まり、いよいよ新生活が始まる新入生に向けて、北大のことを知ってもらい、新生活のイメージを膨らましてもらうこと、友達づくりをサポートすることを目的に新入生歓迎「新友のつどい」を実施します。昨年度までは新入生ウエルカムフェスタとして実施していましたが、今年度は体育会と協力して北大第一体育館を会場に実施します。会場も参加人数も大きくなり、例年以上に盛り上がる企画をつくっています。

■履修相談MANAVI

大学生活で初めて経験する時間割づくりを先輩北大生からサポートする企画です。北大学務部教育推進課と直接連携し、正しい履修制度を伝えるほか、大学生活に合わせた時間割づくりのコツを教えてくださいます。クラス単位での全体説明会、個人で相談ができる個別相談会、特に履修制度が複雑な学部向けの医歯薬獣医説明会を予定しています。

□学生委員会についての情報はHP&Twitterで随時お知らせいたします。

HP : <http://hokudaiqi.web.fc2.com/>
Twitter : @HU_COOP_GL_CS
学生委員会連絡先 : gakusei@coop.hokudai.ac.jp

院生委員会

■いんでないかい2016発行中!

2016年4月に入学する新入大学院生向けの情報誌「いんでないかい」を、今年も発行しています。今回の「いんでないかい2016」では、内部進学者でもあまり知る機会が得られないような専攻科目以外の特別カリキュラムや大学生活に焦点を当て、これからの大学生活をより充実させるための記事をたくさん掲載しています。ミールカードの利用方法や北大観光マップ、食堂のおすすめ商品等、鮮やかなフルカラーでご覧いただけます。「いんでないかい2016」は、北大外部からの入学者を対象にした「院生用入学準備パック」に封入しております。

■院生Welcome Party受付中!

院生による院生の為のウエルカムパーティーを今年も開催します!このウエルカムパーティーでは、自身とは全く違う大学や専攻分野出身の院生と交流を深めたり、新たな発見をするのにつけての場を提供します。開催は4月9日(土)中央食堂2階、15時からで、実費一部負担(500円前後)です。

申込は hokudai-inse-welcome@freeml.com よりお願いします。

■院生委員会連絡先

<http://www.hokudai.seikyone.jp/insei/>
Email : hokudai_insei@coop.hokudai.ac.jp
院生委員会からのイベント等の案内を受け取れるML登録を希望される方もこちらのメールアドレスに「ご連絡下さい」。

留学生委員会

■留学生向けリーフレット完成!

留学生委員一同が先輩としての思いをこめて、北大に来てすぐの留学生の不安や困ったことを軽減できるように、従来の内容を大幅に見直して編集しました。サイズは、A5版28ページです。北大生協を知ってもらって、便利に利用してもらいたいです。生協購買各店・ルームガイド・共済カウンターに置いてあります。

新入留学生のみなさんにご案内していただくと嬉しいですよ。

■今春学期の新入留学生・歓迎イベントの準備を進めています!

① 4月11日(月) 「北海道大学2016春学期留学生オリエンテーション」の中で生協と留学生委員会の紹介、ウエルカムパーティーへの誘いをさせていただきます。

② 4月22日(金) 18時開始

「新入留学生ウエルカムパーティー」を初会場となる工学部食堂で開催します。「中古自転車無料譲渡方法のご案内」や「日用雑貨品無料提供会」も行います。

★参加チケットは

4月11日(月) 16時から、北食堂2階「加入特設コーナー」と「生協会館1階サービスカウンター」にて販売します。



教職員委員会

■教職員総代会議・学内7ヶ所所8月を除く毎月1回、昼休みを利用して開催しています。生協の営業報告の後、教職員の皆様に利用者の立場から組合員の声等を行っています。3月は22、24日の三日間開催しました。

■教職員委員会・毎月1回、18時〜20時に開催しています。総代会議で上がった組合員の声についての検討、きぼうの虹の編集・発行について討議しています。3月は24日に開催しました。2月は新しい試みとして、今年度2回目の拡大教職員委員会を開催しました。詳しくは本誌2・3ページをお読みください。

■きぼうの虹・この冊子です。教職員委員会が編集し偶数月に発行しています。連載記事を常時募集しています。

■生協と組織委員会の存在意義について考えることがあります。2月の拡大教職員委員会を開催してみると、「学生・教職員がまとまって意見集約できる、活動実態と組織力のある団体」として、学内にあまり類をみない団体なのかもしれません。3・4月は毎年人が入れ替わりますが、新陳代謝しつつも強い組織力を維持していかば、生協だけでなく大学にとっても意義ある存在であり続けることでしょう。

■各種連絡先・北大生協理事会室(学内内線:32805)
seikyou@coop.hokudai.ac.jp